

2016年8月18日

報告：「知床赤岩地区 羅臼昆布 エコツアー」（2016年8月12日～13日）に参加して

金沢大学 人間社会研究域 歴史言語文化学系・教授

結城 正美（専門分野：環境文学）

1 はじめに

船が赤岩地区に近づくにつれ、水面下にはっきりと昆布の群生が見えてきた。陽の光を浴びて昆布がうじゃうじゃ生えている。それを若い漁師たちが船の上から腰をかがめ竿を操りながらせつせと採っている。白山の麓に生まれた山育ちの私にとって海の世界は異文化だが、この風景は馴染み深さを感じさせるものであった。というのも、山菜やクレソン、こぼれ種などで自然と育った大葉がそこらじゅうに生えて、採って食べないと大変なことになる、という私のよく知る現実と重なる風景であったからだ。

海と山は対照的な環境であるように見えるが、魚であれ昆布であれ山菜であれ、自然の恵みとして食べものに接する場があるという点で共通する。そこでは、人が自然の恵みを享受するだけでなく、自然のバランスの維持に関わるある種の責任感を人に抱かせるような、人と環境との関係が構築されている。赤岩地区に所狭しと船を浮かべ、ツアー案内役の元漁師や船頭さんとユーモアたっぷりに言葉を交わす漁師たちを見ていて、この人たちはもちろん「商品」として昆布を採っているわけだが、それだけでなく、せつせと昆布を採らないと海の中が昆布だらけになってしまいかねないという、愛情と混じりあった責任感に駆り立てられているのではないか、と思ったりもした。

じつは、私がそのように感じたのには読書経験が関係している。上述した赤岩地区接岸時の風景は、南九州・水俣の暮らしを描いた石牟礼道子の『椿の海の記』の次の一節を思い起こさせるものであった。

・・・あした、あさりご飯をつくろうとおもえば今日、あさりを採りにゆく。すると、あさりだけでなく、アオサも巻貝（びな）の類もはまぐりも潮吹き貝もぼう貝も、ひじきまで採ってくる。欲ばって採ってくるのでなしに、採って帰らぬと、海の中の貝たちの人口がふえてふえて、うじゃうじゃになりはせぬかとおもうくらいに、もうそこらじゅうにいるのだったから。海に降りる山道のついでに、つわ露もわらびも山椒も採れた。山道伝いに、一日海に下れば、ゆうに一週間分は、多彩に食べ分けられるしゅんの海山のものを、背負いながら帰っていた。春の海山のものがそうであったように、秋のものはなおさらにまた種類がことなり、歳時記とは暦の上のことではなくて、家々の暮らしの中身が、大自然の摂理とともにあることをいうのだった。¹

¹ 石牟礼道子『椿の海の記』1976年、朝日文庫、1980年、119頁。

ここに語られているのは、〈自然との共生〉が実践された暮らしにほかならない。無論、石牟礼は「共生」という言葉は使っていない。しかし、「採って帰らぬと、海の中の貝たちの人口がふえてふえて、うじゃうじゃになりはせぬかとおもうくらいに、もうそこらじゅうにいるのだった」という言葉に示されているように、石牟礼の描く水俣漁村の人びとは海の生き物の「人口」増加が気になって仕方がない。放っておけないのである。〈自然保護〉といったメッセージ性を感じさせることなく、自然との持続可能な付き合い方を読者に考えさせる、そういう文学作品の一つである。

本ツアーで最も強い印象を持ったのは、知床半島の生物・文化多様性である。「原生自然」や「秘境」といった言葉で語られる知床が、じつは人の暮らす場であったということ、私はこのツアーに参加するまでほとんど知らなかった。世界遺産として保護されているからそれで良しとし、それ以上は考えなかった、というのが正直なところだ。ツアーを通して、昆布漁は海で完結するものではなく山・川・海のすべてを視野に入れた営みであり、そうした人の暮らしが知床の自然を維持する上で重要な役割を果たしてきたことを学ぶにつれ、知床には原生自然という顔だけでなく、人の暮らしによって維持された自然という顔があることを知った。

2 人の手が入った自然保護

持続可能な昆布漁のために海だけでなく川と山の手入れもする——そのような人と自然との関係が「世界遺産・知床」の土台の一部となっていることは間違いない。しかし、この点は〈原生自然・知床〉のイメージに隠されてしまっているのではないだろうか。そうだとすれば、人を締め出した形での自然保護が理想とされる危険性がある。私はここであえて「危険性」という言葉を使いたい。というのも、アメリカ合衆国で既に見られるように、もともと暮らしていた人を保護区域から締め出したことにより却って自然環境が荒れてしまうことが往々にしてあるからだ。

アメリカの民族植物学者であり作家のゲーリー・ポール・ナブハンの『雨の匂いがする沙漠』にこんな話がある。アメリカ南西部の乾燥地帯にトホノ・オトハム族が長く暮らしていた場所があり、そこは植物が繁茂し鳥が飛来するオアシスのような場所であった。荒野にかくも生物多様性に富む場所があることに目をつけられ、国立公園に指定されたのだが、その際、住人は公園敷地からの退去を命ぜられた。人の住まなくなった公園敷地は次第に荒れ（人によっては〈原生自然〉に戻ったと言うかもしれない）、飛来する鳥の数も種類も減った。ナブハン是这样記している。

・・・国立公園部は野鳥保護区域を作り、観光客相手に、沙漠のオアシスに集う野生植物や野生動物の姿を垣間見せようとした。

が、計画どおりにはいかなかった。せっかく得た「自然のまま」の保護区域に異変が起きはじめたのである。土地は異種混交性を失い、同時に鳥たちも姿を消しはじめた。古い木も枯れていった。それに見合う数の新しい木々が育たなくなった。・・・

毎年夏に育つ種子植物が、いまでは池のほとりにほとんど見られない。土地を耕し、灌漑水路を掘る人間たちがいなければ、鳥類や齧歯類が食物とするこれらの発芽もままならない。

・・・トホノ・オトハム族の農夫である彼は、やがて次のように語った――

「あんたが言ったことを、考えていたんだがね。あっちのオアシスから鳥が減ってしまったという話。そりゃあつまり、鳥は人のいる場所に集まってくるってことだろう。人間がそこに住みついて働く。作物を植え、木に水をやる。すると鳥たちも来て、いっしょにすむようになる。そういう場所が好きなんだよ、鳥は。食べ物もたくさんあるし、こっちだっていっしょに仲良く暮らせるというものだ」²

人の手が入った自然保護への関心は、文学だけでなく政策においても顕著である。その例として、アラスカの国立公園設立をめぐる動きが挙げられる。環境派で知られるジミー・カーター大統領が任期満了直前、アラスカの開発を懸念し、大統領権限を利用しアラスカの多くの土地を 国定公園としてひとまず「保護」した。その際に問題になったのが、公園敷地内に暮らす先住民の存在である。国定公園・国立公園は「原生自然」保護を目的とするため、敷地内の人の居住は許されなかったが、アラスカでは先住民の暮らしが自然環境の維持に大きな役割を果たしており、人の暮らしを締め出した保護のあり方に疑問が投げかけられたのである。議論の結果、国定・国立公園として保護する自然は先住民の暮らしと不可分であるという認識のもと、先住民の居住に干渉せずに公園として指定することになった。³

以上はアメリカの例であるが、日本でも同様の議論を進めることが求められるのではないだろうか。これまで〈原生自然〉が強調されてきた知床半島の保護のあり方に、人の暮らしによって維持されてきた自然という一面を加えることにより、真に持続可能な保護のあり方を考えるための多元的な視点が確立されるはずである。そして、今回の昆布ツアーはそれを具体化するための強力なツールになるだろう。

3 ツアーの内容について

ここまでツアーから学んだこと、参加して考えたことを記してきたが、ここでツアーの内容について見解を示すこととする。

(1) 全体の内容・構成について

初日にビジターセンターで知床半島の模型を見ながら地形や気象や生態系の説明を受けたことは、翌日の現場訪問において有益であった。言葉による説明だけでは抽象的で理解困難と思われる事柄が、ビジターセンターの充実した教育環境を利用することで具体的に伝わる。昆布加工工場での工程の説明は、昆布の食べ比べや現場で働く人による説明を交えるこ

²G. P. ナブハン『雨の匂いのする沙漠』小梨直訳、白水社、1995年、115-116頁。

³ Alfred Runte, *National Parks: The American Experience*, 3rd edition, Lincoln: University of Nebraska Press, 1997, 236-258.

とで、昆布の消費者である参加者が生産の現場に近づく経路を用意してくれた。その生産の現場に翌日実際に訪れることになる。昆布の消費者と生産の現場をつなぐ初日のプログラムは、二日目の赤岩地区訪問の意味を深めるのに重要な役割を果たしていると思う。

(2) ガイドについて

今回のツアーには、エコツアーのガイド（後藤さん）、現在の昆布漁師（井田さん、川口さん）、番屋という故郷をもつ人たち（川端さん、中村さん）をはじめ、複数の案内人がいた。しかも世代の異なる人たちで構成されていたため、ガイドの複数性が際立っていた。このガイドの複数性は次の点で優れている。

- 多角的な説明：エコツアーのガイドによる客観的説明と、現場の経験にもとづく物語的説明が、人の手の入った自然を多角的に考えることを可能にする。一元的な説明では概念的すぎたり、逆に感情に流されたりして、価値観の押し付けに陥ることがあるが、多角的な案内によりそれがうまく回避されている。
- 世代間交流：若手の後藤さん、中堅の現役・井田さん、川口さん、さらに年上と思われる川端さん、中村さんという異なる世代による構成は、本ツアーが、昆布漁の暮らしを古き良き過去としてではなく、持続可能な未来を考える場として次世代に伝えられるべきものと位置付けていることを示唆している。持続可能な未来への方向性が、言葉によってわざわざ説明されるのではなく、ガイド体制から自然と感じられる形になっていることに、昆布漁文化への愛おしさが滲み出ているように思われた。

(3) 目的について

本ツアーのパンフレット冒頭に、「伝統的に続く羅臼昆布漁法・先人の苦勞を知ること、知床における人と自然 [の] 関わり合いや共生の歴史を知り・考えること」とある。前半に記されている昆布漁や先人の苦勞については、ツアー参加を通してよくわかったが、後半にある〈共生〉をめぐるより一般的な問題へのアプローチは具体性に欠けているように思われる。言い換えれば、ツアー内容が昆布漁の文化に終始し、それを通してツアーが何を目指しているかが明確に伝わってこなかった。

目的が羅臼昆布漁を学ぶことにあるのか、赤岩地区の番屋見学等によってかつての暮らしを知ることにあるのか、それとも昆布漁の暮らしを契機として持続可能な生活を考えることにあるのか。おそらく最後の点に目的があるのだろう（それは上述したツアー構成に示唆されているが、あくまで示唆のレベルに留まっている）。無論、目的を明確にすることは、価値観の押し付けにつながる恐れがあるため、慎重な姿勢が求められる。しかし、ツアー内容やガイド構成がよく練られているのに対し目的が曖昧であったことは、今後検討すべき課題であろう。

ガイドの複数性の項目で指摘したように、本ツアーの売りは知床を多角的に知ることにあると思う。そこをツアーの目的とするような形で案内文を再検討してはどうだろうか。

おわりに

冒頭で言及した作家・石牟礼道子のほかに、本ツアーを通して私は何度か、写真家・星野道夫の言葉を思い起こした。星野はアラスカをはじめとする原生自然の写真で知られるが、彼がアラスカに惹かれたのは「原生自然」ではなくそこに「人の暮らし」があったからだという——「たとえば僕は南極には興味がないんですよ。人が暮らしていないからだと思うんです。アラスカにひかれるのは、やっぱり人が暮らしているからなんです」と星野はインタビューで語っている。⁴

人のいない、人を寄せ付けない現生自然の保護と、人が世話をしてきたことで豊かさを保ってきた自然の保護、これらは両方とも重要である。そして、保護のあり方はそれぞれに応じた形で考える必要がある。世界遺産・知床の豊かな自然に人の暮らしが深く関わっていたのであれば、そこで築かれた人と環境との関係を学ぶことは、個々人が現代の生活や環境観を批判的に再考しオルタナティブな暮らしを探求する上で不可欠であろう。

伝統的な昆布漁を具体的なフィールドとする本ツアーは、知床の豊かな自然と不可分な人の暮らしを考えさせるだけでなく、持続可能な未来を考える視野を提供しうるものである。その意味で、エコツーリズム、環境教育、環境思想をはじめとする様々な分野において、本ツアーがもつ潜在的意義は決して小さくない。

⁴湯川豊『終わりのない旅——星野道夫インタビュー』スイッチ・パブリッシング、2006年、92頁。